

It's ショウ 山タイム



新党日本
田中 康夫代表

間違った決められる政治

内政も外政も「決められない政治」が野田政権下で続いています。昨年12月の日韓首脳会談で、竹島問題は一言も触れられませんでした。僕が今年2月の予算委員会ですと、外務大臣レベルで話し合うべき事象だと首相は答弁しました。

「北方対策本部しか存在しない内閣府に、領土・領海を統合的に担当する部署を設置すべき」との提言への答弁は「検討する」。即断・即決せず、たな

ざらしを意味します。その程度の認識だった首相は、竹島、尖閣諸島に関する二つの国会決議が8月24日に採択されるや、「最大の責任は平和を守り、国民の安全を保障することだ。国民の主権を守り、ふるさとの領土、領海を守る」と胸を張りました。

が、その緊急会見でも具体的な方策は、何も語られなかったのです。竹島の実効支配を画策する韓国政府を「他山の石」として、悪天候時の避難港と灯台、高出力の無線基地を尖閣諸島に設置する。この程度は言明すべきでした。領海侵犯を水際で阻止もせず、日本が実効支配する尖閣諸島への先方の上陸をおうように待ち構えていた政府の対応こそ、「決められない政治」そのものです。

「福島の再生なくして日本の再生なし」と首相会見で約束した内閣発足から丸1年。その対応と成果は、進展どころか逆に悪化の一途です。無色・透明・無臭で人間が察知し得ぬ放射能

は消え去らない厄介な存在。除染は「移染」にすぎず、さらなる被ばくの悲劇を生み出します。にもかかわらず、人口6千人の飯館村で、ゼネコンや東電関連企業が元請けした除染費用は現時点でも3200億円。村民1人当たり5000万円強。

昨年12月8日、「国会 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会」（国会事故調）の初会合で僕は、フクイチ周辺は「放射能に占領された領土」。30^{キログラム}圏内は核廃棄物最終処分場として居住禁止区域に設定し、愛着を抱く郷里から離れる当該住民には新たな住居と職業を保証・提供すべき、と陳述しました。

一方、福島県内の子どももの甲状腺検査を「差配」する日本甲状腺学会理事長の山下俊一・福島県立医大副学長は「国民の安全を保証する」よりも「行政のメンツを優先する」放言を繰り返し、保護者から怒りの声が上がっています。毎週金曜夕刻、1万人を超え

る人々が首相官邸前や国会正門前に「再稼働反対」で集うのも、責任の所在すら明確にせず、目指すべき未来も国民に提示せず、無為無策な混迷が続く「3・11」以降の政治に対する異議申し立て。僕も日本を憂う国民の一人として毎週、非暴力・不服従を象徴する白い風船を数千個、参加者に手渡しています。動員型デモとは対極の新しいムーブメントです。

抗議活動終了時、「再稼働反対」とつぶやきながらセーフティコーンを片付ける機動隊員に幾度か出会いました。自衛隊員と共に凄惨な被災地の現場で活動した彼らも、組織の一人である前に一人の国民として、消費税・再稼働・環太平洋連携協定（TPP）に代表される、間違った「決められる政治」に疑問を感じているのでしょうか。そうした声に気付いていないのは、官邸内に籠城する一部の政治家だけになりつつある平成24年の晩夏です。